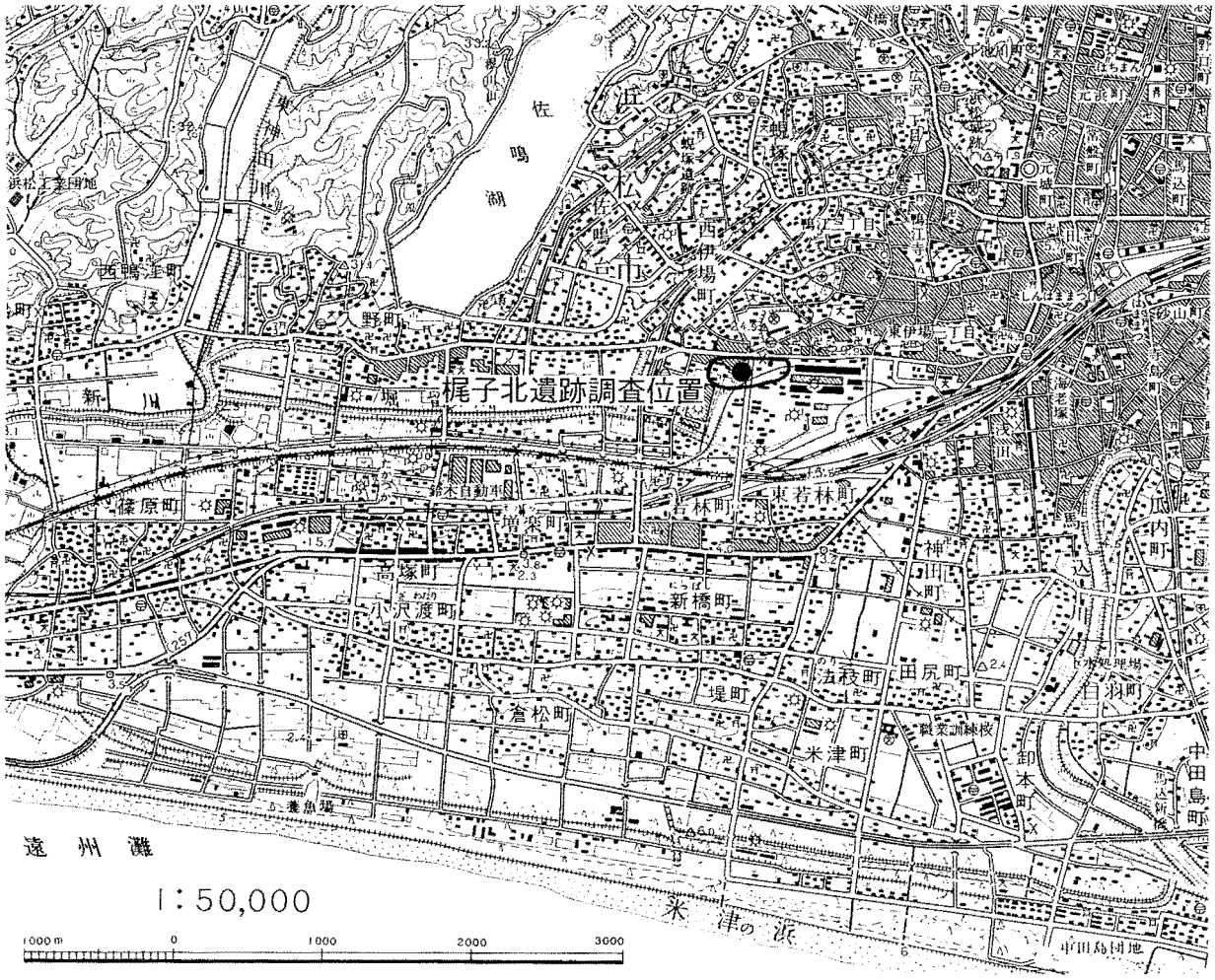
静岡県浜松市（はままつし）

梶子北遺跡Ⅱ（かじこきた）



1999.12

財団法人　浜松市文化協会

例　　言

1．本書は，静岡県職員住宅建設工事に先立ち，静岡県浜松市西伊場町2248－18外で実施した梶子北遺跡の発掘調査報告書である。

2．梶子北遺跡は，ＪＲ東海浜松工場内に位置する梶子遺跡の北西側にあることから命名されたものであり，大きくは伊場遺跡群（伊場・城山・梶子遺跡）に含まれる。当遺跡の調査は，今回で２度目になることから，２次調査とする。

3．調査期間

　　契約期間　　1999年10月15日～1999年12月10日

　　現地発掘調査　　1999年10月18日～1999年10月22日（５日間）

　　整理・報告作業　　1999年11月（１ヶ月間）

4．調査面積　　約150㎡

　　（用地面積一約1,800㎡）

5．調査体制

　　調査委託者　　静岡県（知事　石川嘉延）

　　調査受託者　　財団法人浜松市文化協会（理事長　中村雄次）

　　調査指導機関　　浜松市博物館

　　調査担当者　　鈴木敏則（浜松市博物館）

　　補助調査員　　倉田晴巳（浜松市博物館）

6．調査に係る費用は，全額委託者が負担した。

7．本書は，倉田晴巳，熊谷洋子の協力を得て，鈴木敏則が執筆した。

8．調査に係る諸記録及び出土遺物は，浜松市博物館(浜松市蜆塚4-22-1)が保管している。

調査名称	調査期間	面積	原因	調査主体
第１次	1976.12	40㎡	職員便所建設工事	浜松市教育委員会
第２次	1977.１～５	200㎡	配水管埋設工事	浜松市教育委員会
第３次	1978.２～３	288㎡	変圧器工場建設工事	浜松市教育委員会
第４次	1978.12～1979･２	520㎡	主変圧器保管庫増設工事	浜松市教育委員会
第５次	1979.10～12	360㎡	新幹線電車検修要員教育設備新設工事	浜松市遺跡調査会
第６次	1982.５～12	1747㎡	更衣室浴場及び守衛本部建設工事	浜松市遺跡調査会
第７次	1982.10～1983.３	1401㎡	工機作業場新設工事	浜松市遺跡調査会
市河川その１	1983.11～1984.２	233㎡	浜松市水路改修工事	浜松市教育委員会
第８次	1990.８～12	2493㎡	社員会食所及び汚物タンク作業場建設工事	(財)浜松市文化協会
第９次	1992.７～12	2000㎡	南伊場社宅新築工事	(財)浜松市文化協会
第９次付随	1993.３～４	40㎡	南伊場社宅新築に伴う配水設備埋設工事	浜松市教育委員会
市下水その2	1994.12～1995.１	31㎡	浜松市下水道工事	浜松市教育委員会
梶子北	1994.２～1995.７	13200㎡	雄踏街道拡幅及び代替地造成工事	(財)浜松市文化協会
梶子北２次	1999.10	150㎡	県職員住宅の建設工事	(財)浜松市文化協会

調査期間は現地調査のみ

表１　梶子・梶子北遺跡発掘調査一覧表

はじめに

浜松市伊場町地内には，伊場遺跡をはじめ，城山・梶子遺跡があり，それらは古代敷智郡衙に関係する遺跡として，またそれらに伴う木簡や墨書土器を出土する遺跡として，全国的に有名である。梶子北遺跡の調査（以下１次調査と呼ぶ）は1994～95年にかけて行われたが，９世紀代の郡衙の郡庁もしくは館と考えられる整然と並ぶ掘立柱建物群が検出された。北側の流路からは，「大領」と書かれた木簡や，役人が身につけていた銅製の帯金具が出土し注目された。また下層からは弥生時代の水田跡や土壙群も広範囲にわたって検出された。水田に伴う大畦畔は１辺30mほどで，その中を数m角の小畦畔で区画するものであった。さらにその下層には土壙があり，調査区南半全域に300基以上が認められた。

今回発掘した県職員住宅の敷地は，１次調査区とは南北に走る市道を挟んで，西側に位置する。遺跡が立地する地形は，古くは海浜砂丘間に挟まれた湿地帯であるが，数千年前に流入した洪水砂層（微高地）を基盤層としている。北側にある雄踏街道の部分が第１砂丘，南方の伊場遺跡と城山遺跡が立地する所が第２砂丘にあたる。梶子北遺跡のすぐ南側にある梶子遺跡も，この砂丘間の湿地（砂堤列間湿地）に形成された微高地に立地する。

西伊場町内における静岡県職員住宅の建替に伴っての発掘調査は，今回が始めてである。しかし1993年には今回の調査区の南側で，警察官宿舎の建替に先だって試掘調査を行っている。調査の結果は，水田らしい堆積層は認められたものの，それに伴う出土遺物は確認されなかった。また盛土直下の旧耕作土層から出土した土器（奈良～平安）は数片で，いずれも磨滅していた。そのため，建設予定地は遺跡から外れていると判断し，本調査は行わなかった。

今回の調査区は，県職員住宅建設に伴うものであるが，試掘調査は1997年11月28日に行い，弥生時代後期の土壙を認めた。残念ながら調査区が狭く，遺物そのものは検出されなかったが，東側の梶子北遺跡の調査から，本来なら遺物を含むであろう層位が当地点でも認められた。よって本調査は必要であると判断し，その旨を静岡県に伝えた。

今年度に至り，職員住宅の建設が具体化したことにより，11月より発掘調査をすることで，静岡県（主管課ライフプラン推進室）と浜松市教育委員会（浜松市博物館）との間で合意がなされた。11月15日には静岡県と財団法人浜松市文化協会との間で，発掘に関わる契約が取り交わされ，11月18日より作業が開始された。

調査次	発行者	発行年月日	題名
第１次	浜松市教育委員会	1976年	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査略報(正式刊行物ではない)
第２次	浜松市遺跡調査会	1977年６月	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査略報Ⅱ
第３次	浜松市教育委員会	1978年３月25日	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ
第４次	浜松市教育委員会	1979年９月	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ
第５次	浜松市遺跡調査会	1980年１月	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ
第６次	浜松市遺跡調査会	1983年５月25日	国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報
第７次	浜松市遺跡調査会	1983年12月15日	国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報
市その１	浜松市教育委員会	1984年３月25日	梶子遺跡発掘調査概要［（その１）とする］
第８次	財団法人浜松市文化協会	1991年12月	梶子遺跡Ⅷ
第９次	財団法人浜松市文化協会	1994年３月	梶子遺跡Ⅸ
９次付随	浜松市教育委員会	1994年５月	梶子遺跡Ⅸ付録
市その２	浜松市教育委員会	1997年５月	梶子遺跡（その２）
梶子北（１次）	財団法人浜松市文化協会	1997年３月	梶子北遺跡（遺構編）
		1998年３月	梶子北遺跡（遺物編）
梶北２次	財団法人浜松市文化協会	1999年12月	梶子北遺跡Ⅱ

表２　梶子・梶子北遺跡関係報告書一覧表

Ⅰ. 調　査　経　過

10月14日（木）晴　事前に発掘機材を整え，調査区の除草を職員で行う。

10月15日（金）晴　静岡県と(財)浜松市文化協会との間で，発掘調査の契約が結ばれる。

10月18日（月）曇　発掘区周辺の除草をし，バックフォーで盛土・旧表土層の掘削を開始する。

10月19日（火）雨　バックフォーによる掘削を継続。灰色粘土層上面（１次調査面）での遺構検出をほぼ終了する。遺物（８～13世紀）は出土するが，遺構は認められなかった。

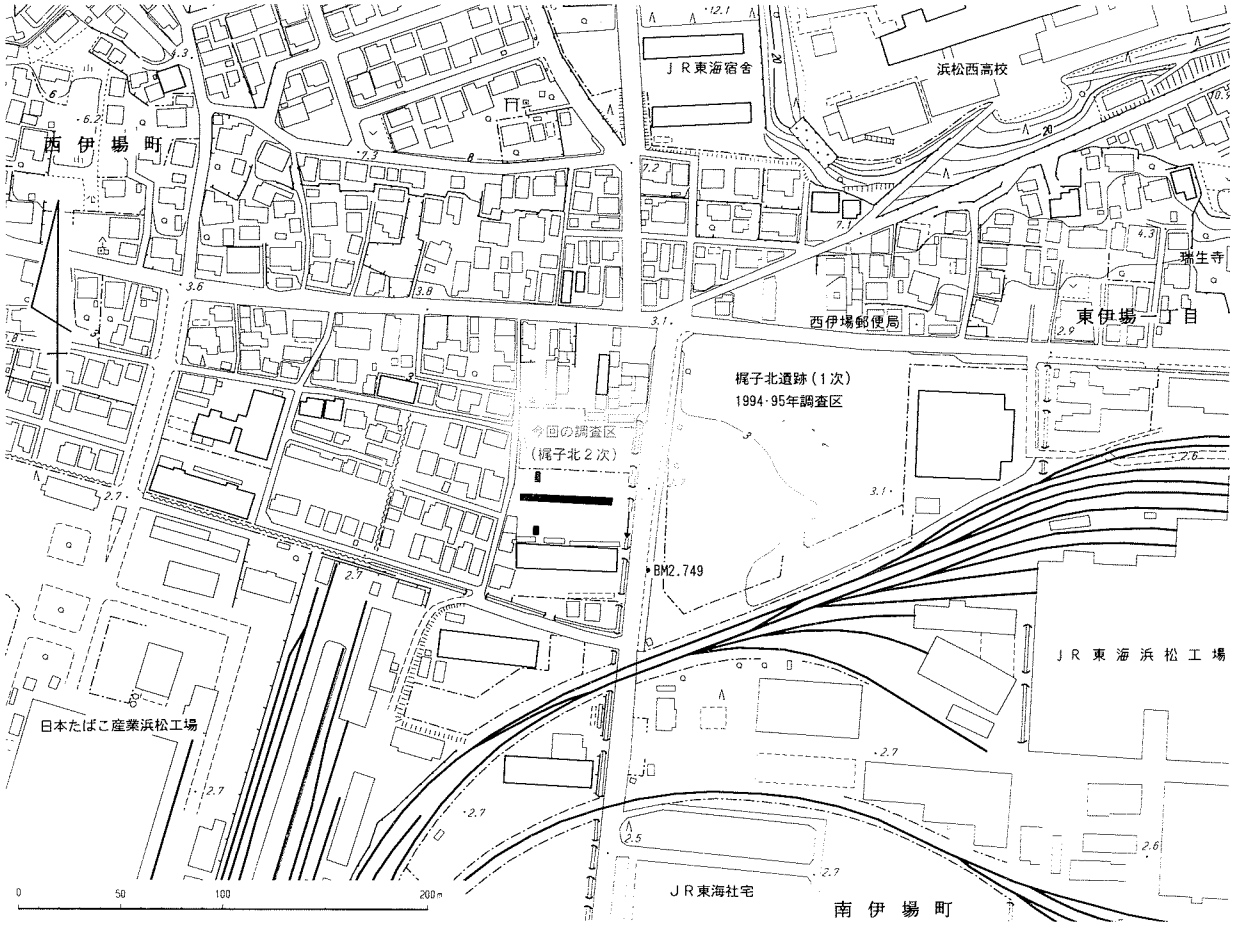
10月20日（水）曇　灰色粘土層と黒色粘土層を除去し，基盤砂層面（２次調査面）で弥生時代後期の土壙を検出する。３基の土壙を認めた。元の建物のパイルが残存しており，重機掘削，手掘り作業は難航した。

10月21日（木）晴　壁面を削り，土層の堆積状況を確認する。調査区全景と各遺構の写真撮影を行った後，実測作業を行う。用地の南北の端にグリッドを設定し，南北の土層の傾斜及び堆積状況を確認する。埋戻し作業にかかる。

10月22日（金）晴　埋戻し作業を行う。作業員により敷地内の片付けを行う。

10月25日（月）晴　埋戻しが完了したため，発掘機材を片付け，完全に撤収する。

11月　遺物・図面などの整理作業及び報告書作成作業を行う。



第１図　梶子北遺跡調査位置図

Ⅱ．調査の成果（検出遺構）

1．土　層

調査区は，東西方向に長く，幅３ｍ，長さ47ｍにわたる。南壁の土層堆積は，第３図中段に示した。層位は，以下の５層を基本とする。

１層　盛土（山土による盛土）
２層　灰緑色粘土層（ドブ色）
３層　灰色粘土層（伊場Ｃ層）
４層　黒色粘土層（伊場Ｄ＝梶子ＤＤ'層）
５層　灰色砂層（洪水砂層＝ベース）

２層は，中近世以降の遺物を含み，盛土が行われるまで耕作が及んでいた層である。

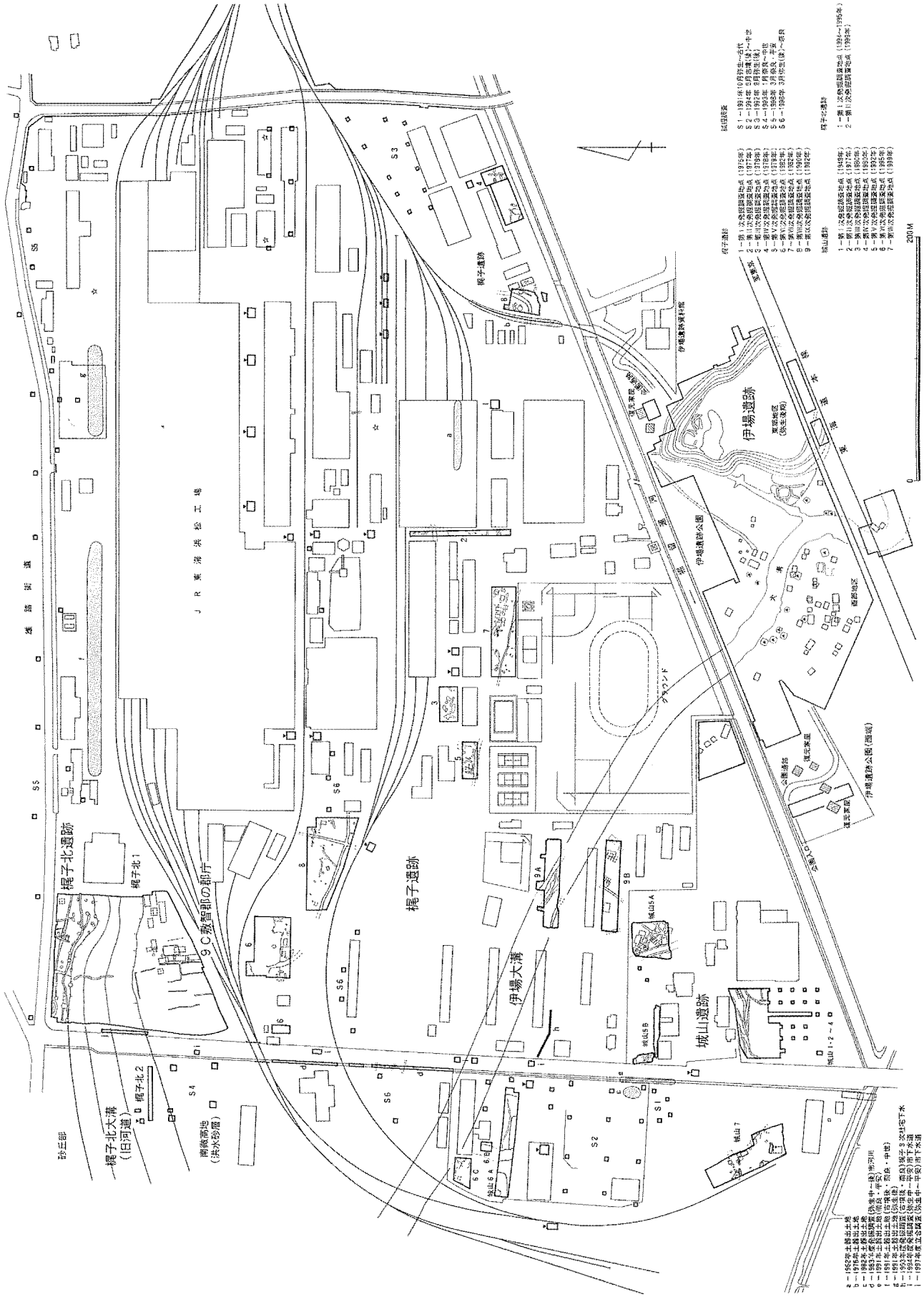
３層は明るい灰色粘土層で，比較的しまった層である。基本的には無遺物層であるが，この層の上面もしくは２層との境界からは，８世紀～10世紀の遺物が出土した。伊場遺跡ではＣ層と呼ばれ，弥生時代後期後半～古墳時代前期に堆積した層とされた。梶子北遺跡の１次調査では，弥生時代後期の水田を覆う土層で，古墳時代前期の古式土師器を検出した。またこの層を基盤層として，９～10世紀代の敷智郡の郡庁もしくは館に伴う建物群が検出された。この建物群を検出した所の標高は＋70～80cmであるのに対し，今回の３層上面（１次調査面）は60cm前後であり，遺構面はだいぶ西に向かって下がっていることが判る。建物群は，１次調査区でも標高70cmを下回る所では全く見られなくなり，遺構としては排水もしくは水田に伴うであろう水路（溝）が存在しただけであった。

４層は黒色粘土層で，伊場ではＤ層，梶子６次調査区ではＤＤ'層と呼ばれたものである。基本的に，弥生時代中～後期前半の遺物包含層である。ただし今回の調査区では，遺物は検出されなかった。この層の上部には撹拌が見られ，水田耕作層となっていたようである。下部は灰色及び粘質が強く，無遺物層である。なお１次調査区では，弥生時代後期の大畦畔が４層を盛り上げて作られていた。

５層は，河川起源の洪水砂層であり，目につく雲母は見られないし，上部には草の根が多く認められた。５層は縄文時代中期前半以降，カワゴ平火山灰（約2,900年前）が降り積もる以前に堆積したことが，１次調査の結果判明している。５層は，放射性炭素Ｃ14の年代測定では，4,170±100ＢＰであることから，およそ4,000年前の洪水に伴い，第１・２砂堤列間湿地に流入した砂層であると推定されるに至った。１次調査区では，５層の直上層で縄文時代後期の土器を検出した。

以上５つの基本層は，今回の調査区ではおおよそ東西にわたって水平といえるが，わずかではあるが西側に向かって傾斜している様にも見える。このことは後述するが，第２・５図を見てもらえば分かるように，本調査区が旧河道内にあり，その南側斜面に対し斜め方向に設定されているためである。

今回の発掘調査では，用地の南端と北端にもグリッドを設定した。第３図の上段に位置図（Ｓ・Ｎグリッド）を，中段右側に層序を示した。この２つのグリッドの土層堆積状況から，面白い結果を得ることができた。南側（Ｓグリッド）では，黒色粘土の盛り上がりが認められ，これが大きな畦畔ではないかと考えられるに至った。またこの大畦畔の北側の層位は，本調査区の層序とほぼ同じであった。北側（Ｎグリッド）では，２層と３層との間にⅢ層と記した茶褐色ピート層，Ⅳ層とした褐黒色粘土層が認められた。Ⅲ・Ⅳ層は，伊場大溝や１次調査区の梶子北大溝のⅢ・Ⅳ層に対比できる層である。前者は10～13世紀，後者は８～10世紀の遺物包含層で，旧流路内堆積層である。つまり今回の



第２図　伊場遺跡群全体図

調査対象用地は，ちょうど梶子北大溝の南側肩部から斜面部にあたり，Ｓグリッドが肩部，本調査区が斜面部，Ｎグリッドが流路（河底）近くに位置すると考えられる。

２．検出遺構（第３図）

発掘調査は，灰色粘土層（３層）の上面と，砂層（５層）上面の２面において，遺構検出作業を行った。前者を１次調査面，後者を２次調査面とした。１次調査面では，１次調査区においては律令時代の遺構（郡衙関連建物群や溝）を検出したが，今回の調査では何一つ遺構を検出することはできなかった。２次調査面では，１次調査区から広がる弥生時代後期前半と考えられる土壙群（３基）を検出した。なおＳグリッドにおいては，１次調査面で弥生時代後期後半～古墳時代前期の水田に伴う大畦畔を検出した。

ａ．土壙（弥生時代後期前半）

基盤砂層（５層）を切り込む土壙３基（ＳＫ01～03）を，２次調査面で検出した。またこれらの土壙の他にも，本調査に先だって行った用地北西角の試掘区でも，その存在が確認された（第５図下段）。

ＳＫ01

調査区西端に設定した基準杭から東へ約13mで，しかも北壁に寄った位置で検出された。平面形は，南北に長い楕円形もしくは隅丸長方形を呈していた。比較的明瞭な掘り方をしており，覆土は灰色粘土ブロックを含む黒褐色粘土層である。出土遺物は，認められなかった。大きさは，南北約120cm×東西94cmである。深さは，検出面から23cmである。

ＳＫ02

基準杭から東へ33mの所で，調査区の中心軸から北にずれて検出された。平面形はＳＫ01と同じく，南北に長い楕円形もしくは隅丸長方形である。覆土の状況も同じで，出土遺物も認められなかった。大きさは126cm×78cm，深さは検出面から20cmである。

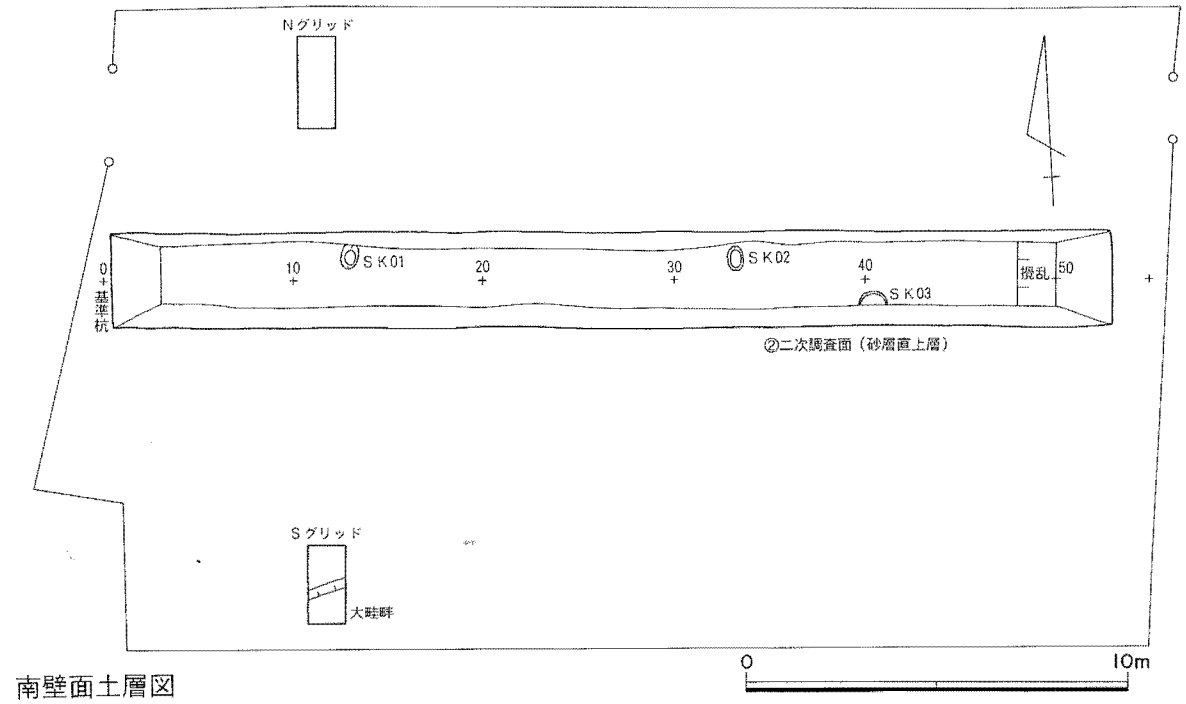
ＳＫ03

基準杭から東へ40mの所で，南壁面にかかって検出された。土壙の南側が調査区外に及んでいるが，東西に長い土壙と推定される。この土壙の平面形は角の折れが強いことから，隅丸長方形であったと考えられる。掘り込まれている層位は，４層の途中からである。４層の上半は土壙が掘られて以降に水田耕作層となり，撹拌を受けている。覆土は，灰色粘土ブロックを含む黒褐色粘土層である。遺物は，検出されなかった。大きさは，掘り込み面で（土層図から）東西120cm×南北76cm以上，深さは30cmである。

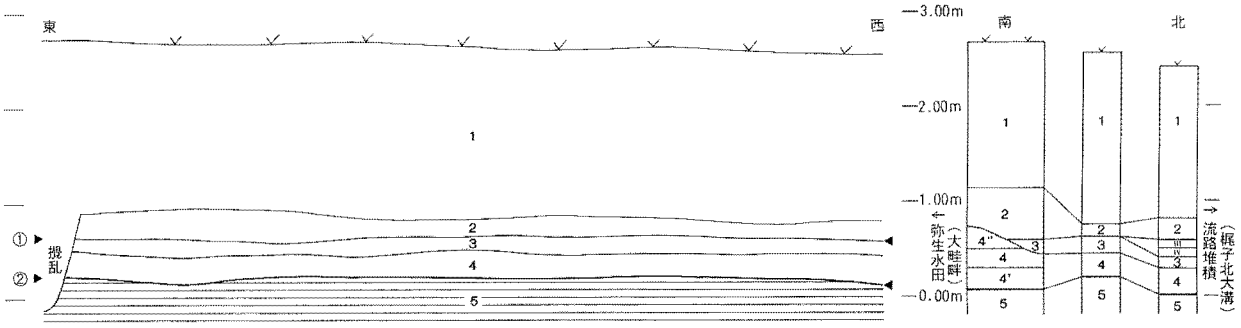
土壙の年代

土壙からの出土遺物は，今回の調査では全く検出されなかった。土壙の年代は，土壙の上を覆う４層を水田耕作層としていた時期が，弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてであること（１次調査で判明）から，それ以前ということになる。なお４層自体の堆積は弥生時代中期中葉に始まることから，土壙自体も中期に遡る可能性がある。しかし４層の途中から切り込んでいることを考慮すると，概ね後期前半と考えるのが無難である。１次調査においては300基以上の土壙が調査されているが，土器が共伴したのは，ＳＫ136の１例だけであった。これも壺の体部破片で，後期前半の可能性が高いとしか言えないものであった。基本的に土器などを共伴しない性格の土壙と言える。

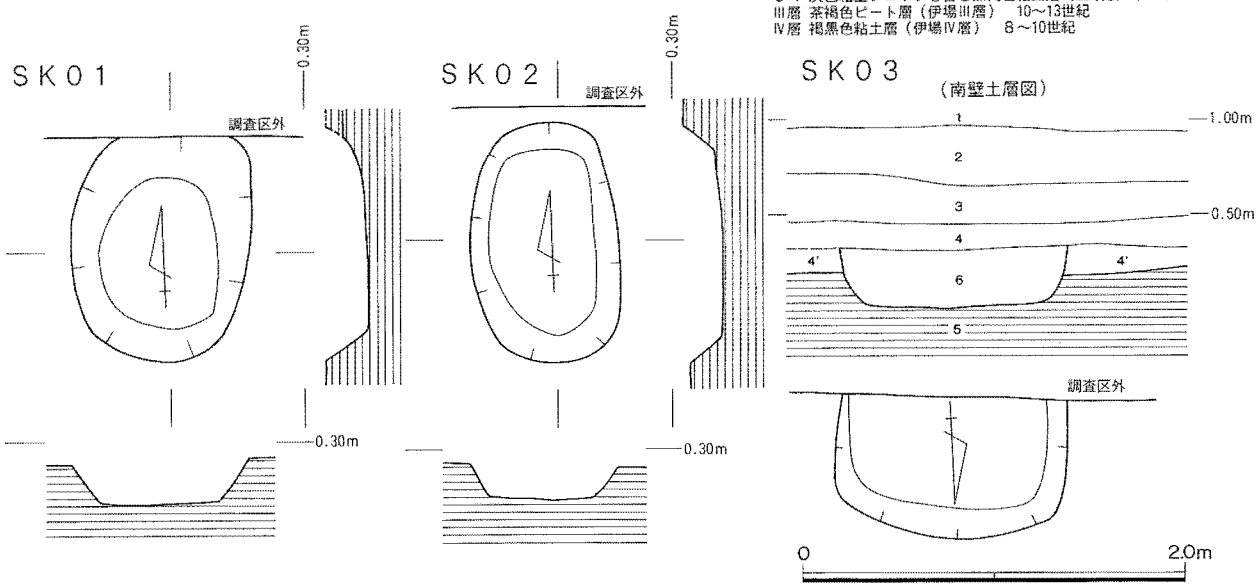
調査区全体図



南壁面土層図



土層説明
1．盛土
2．灰緑色粘土（ドブ色）　中・近世以降
3．灰色粘土層（伊場C層）　3・4世紀
4．黒色粘土層（伊場D層）　弥生中・後期
4'．黒色粘土層（やや灰色＝無遺物層）
4''．黒灰褐色粘土層
5．灰色砂層（洪水砂層＝ベース）
6．灰色粘土ブロックを含む黒褐色粘土層（土壙覆土）　弥生後期
III層 茶褐色ピート層（伊場III層）　10～13世紀
IV層 褐黒色粘土層（伊場IV層）　8～10世紀



第3図　調査区全体図・土層図・遺構図

b．大畦畔

用地の南端に設定したＳグリッドで，黒色土層の盛り上がりが確認された（第３図中段右土層図）。この盛り上がりの上は，２層に達していることから，中近世にも痕跡を留めていた可能性が高い。この盛り上がりは，１次調査区での在り方と同じく，河道の南肩に設けられた水田に伴う大畦畔と見られる。大畦畔の北側には，灰色粘土層（３層）が存在し，北（河道側）に延びている。１次調査区では，大畦畔のある所が最も高く，南へ行くほど低くなっていた。

水田は，一辺30mほどの大畦畔により方形に区画され，その中に一辺数mの方形の小畦畔が設けられていた。水は，地形及び水口から，大畦畔を単位に，旧河道から入れられ，南へと流されていたことが判る。今回発見された大畦畔は，調査位置から見て第５図に示したごとく，１次調査区の旧河道南肩の大畦畔に続いていたと考えられる。そしてこの大畦畔の南側にも，弥生後期の水田が累々と存在したことが推定されるに至った。またＳグリッドから本調査区そして北側のＮグリッドにおいても，４層上半で水田に伴うであろう撹拌が認められた。このことから，旧河道内の緩やかな南側斜面部でも水田耕作が行われていたと考えられる。これは，１次調査でも認められたことである。出水の危険性はあるものの，生産の増加を期待し，作付けが行われたと想像される。ただし，明確な畦畔は見られず，単発かつ短期的な作付けであったと思われる。

c．梶子北大溝

Ｎグリッドでは，梶子北大溝の堆積層を認めることができた。Ⅲ層は茶褐色のピート層であるが，後世の水田に伴う撹拌により，層としては途切れ途切れになっている。Ⅳ層は褐黒色粘土層で，検出した直後は肌色に近いが，徐々に褐色化する。梶子北大溝でも，Ⅲ・Ⅳ層の下は灰色粘土層（３層＝Ｃ層），黒色粘土層（４層＝ＤＤ'層）があり，最下層にラミナが発達した茶褐色ピートが存在した。このピート層の内，その上部にカワゴ平火山灰（約2,900年前）が検出されている。このピートと４層との関係は，河道の南側でピート層の分解が進んでいるため，４層との識別が不明確となっている。

Ｎグリッドの基盤砂層５層の標高はほぼ０ｍであり，１次調査では旧河道の南側下端（河底部の南端）から10mほど南の所にあたる。またＳグリッドが旧河道の南肩部であることから，梶子北大溝は１次調査区から河幅をさらに広げ，やや南に向きを変え，西へ流れていたと考えられる。

Ⅲ．調査の成果（出土遺物）

出土遺物には土器，木製品，石材があり，全て２・３層の境界及び２層から出土した。土器は主に，８世紀の須恵器と土師器，10世紀の灰釉陶器，13世紀の山茶碗と青磁である。木製品には箸，杭，板材がある。石材は，砥石用の白色凝灰岩が発見された。

１．土器（第４図）

a．８世紀

須恵器では坏蓋と甕と壺が，土師器では坏身と甕が出土した。

第４図１の坏蓋は扁平宝珠形の摘みがついたもので，摘みの大きさから見て８世紀前半と考えられる。２も同じであるが，天井部の破片である。

３の甕は口縁部破片で，口唇部は広い面が作り出され，中間に段を持つ。10～13の甕体部は，外面に平行叩，内面に薄い同心円叩の後ケズリ調整が加えられたもので，７～８世紀の湖西窯産の須恵器である。

７～９は壺の体部破片であり，７と９の内面はケズリ調整が施されている。これらも湖西産である。

４の土師器坏身は，丸味を持つ体部から外反する口縁部がつくものである。体部にはオサエと粘土紐の痕跡を留めている。

土師器甕は，頸部破片と体部小片が出土した。頸部破片の５は，表面が磨滅している。

ｂ．10世紀

灰釉陶器は，碗だけである。碗は，14～17の４点が出土した。14の底部には，糸切り痕が認められる。いずれも，形態からＯ53～Ｈ72型式に属するもので，10世紀代の浜北もしくは二川窯の製品と考えられる。

ｃ．13世紀

13世紀の出土遺物には，山茶碗と大平鉢と青磁碗がある。18の山茶碗の高台は潰れており，端面には籾の痕跡はなく，いわゆる砂底である。これは，湖西産もしくは渥美産である。また19の大平鉢は体部破片であり，胎土はかなりざらついている。

青磁碗は小片であり，図示はしていないが，写真図版４上段28に示した。これは，中国宋代の龍泉窯の製品であろう。

ｄ．その他

その他，８世紀と思われる土製品６と，戦国時代のロクロ成形のかわらけ20と21が存在した。土製品は，土馬もしくは土製人形の破片と思われる。

２．木製品

22は細い角棒で，先端が面取り調整されたものである。これはスギ材製で，形態から箸の可能性が高いが，やや太い。大きさは，長さ15.7㎝，幅0.9㎝，厚さ0.6㎝である。

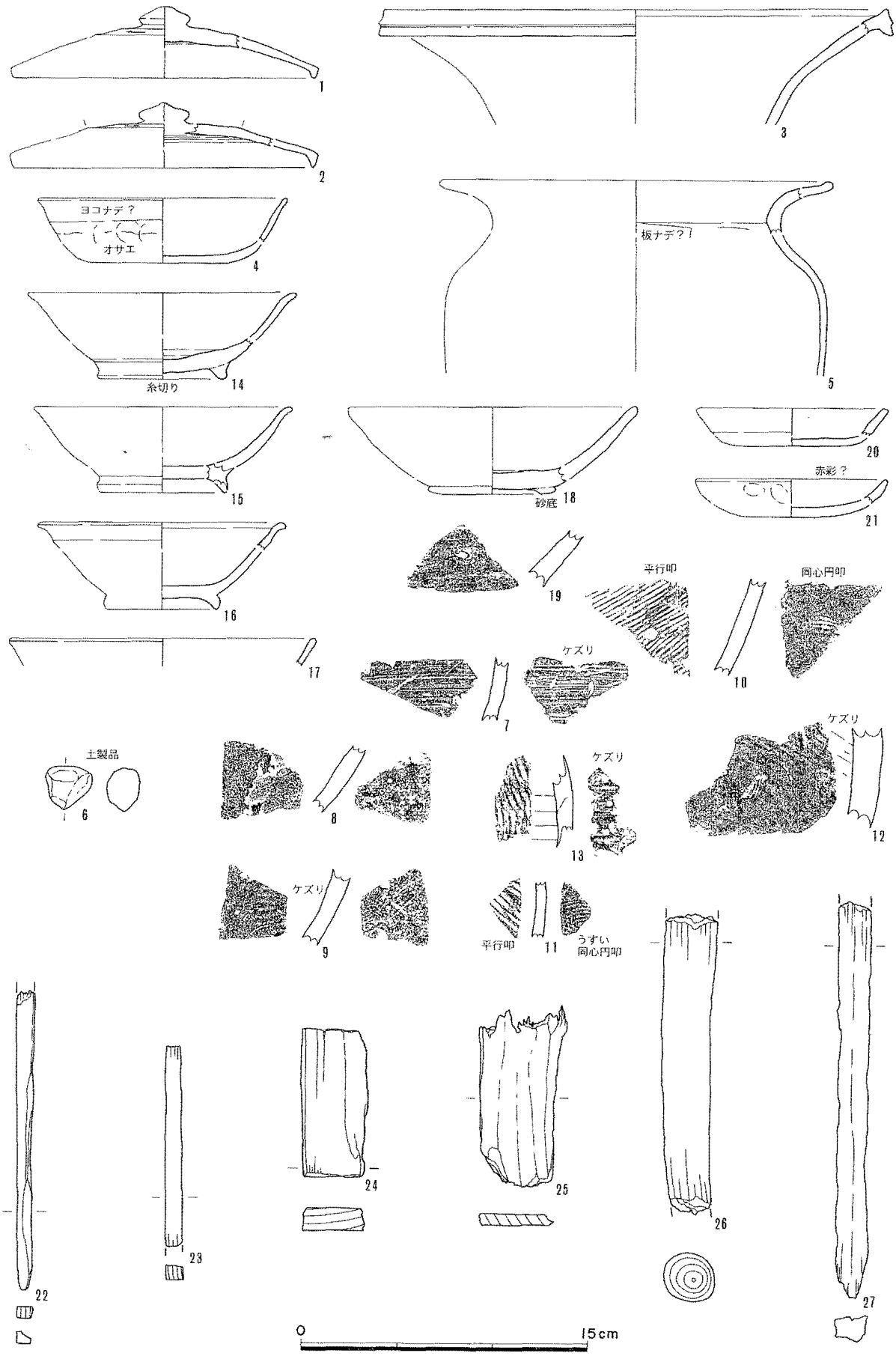
23は細い角棒で，下端が欠けている。スギ材製で，大きさは，長さ10.6㎝，幅0.9㎝，厚さ0.8㎝である。

24と25は，スギ材製の板材である。大きさは，24が長さ7.9㎝，幅3.5㎝，厚さ1.2㎝，25が長さ9.4㎝，幅4.6㎝，厚さ0.6㎝である。

26は，ヒノキ材製の丸い棒である。表皮は取り除かれている。先端が欠損しているため，何の製品かは不明である。大きさは，長さ15.9㎝，直径2.7㎝である。

27はヒノキ材製の角棒で，先端が加工されていたようであるが，全体の腐朽が著しい。これは，細いが角杭であろう。この杭は３層上面に存在したもので，８世紀代の可能性が高い。大きさは，長さ20.8㎝，幅1.7㎝，厚さ1.4㎝である。

木製品は，以上の５点が出土した。年代は27が８世紀代である以外は，２層からの出土であり，中近世の製品と考えられる。


1
2
3
ヨコナデ？
オサエ
4
板ナデ？
5
糸切り
14
15
砂底
18
20
赤彩？
21
16
19
平行叩
同心円叩
17
ケズリ
10
7
土製品
6
8
ケズリ
13
ケズリ
12
ケズリ
9
平行叩
11
うすい
同心円叩
22
23
24
25
26
27
0
15cm

第４図　出土遺物実測図

Ⅳ．ま　と　め

1．敷智郡衙関係

１次調査区の南東部では，９～10世紀代の敷智郡の郡庁もしくは館と推定される建物群が認められた。しかし今回の調査では，建物など郡衙関連施設は全く検出されなかった。これは基盤層（３層）の高さが，当調査区では１次調査区の建物群のそれより10㎝以上も低くなっていたためである。しかも今回の調査区は，すでに旧河道内の南斜面部に入っているためでもある。

なお１次調査では，銅製帯金具，「大領」木簡，絵馬，墨書土器，緑釉陶器などの優れた遺物も出土したが，今回はそれらも認められなかった。郡衙関係建物群が存在した所からは西へ100m近く離れていることから，すでにそうした性格の遺構は，及んでいなかったものと考えられる。

2．弥生時代後期後半の水田

１次調査により，第５図上段に示すように，梶子北大溝の南には弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて，水田が営まれていたことが判明した。今回の調査でも，用地の南端に設定したＳグリッドにおいて，当期と考えられる水田に伴う大畦畔を検出した。これは位置関係から，大溝の南肩部に作られた大畦畔と推定することができる。この大畦畔から流路側にあたる本調査区でも水田の存在が認められたことにより，１次調査区からさらに西へ，そして旧河道の中までも耕作地とした広域な水田の存在が明らかとなった。

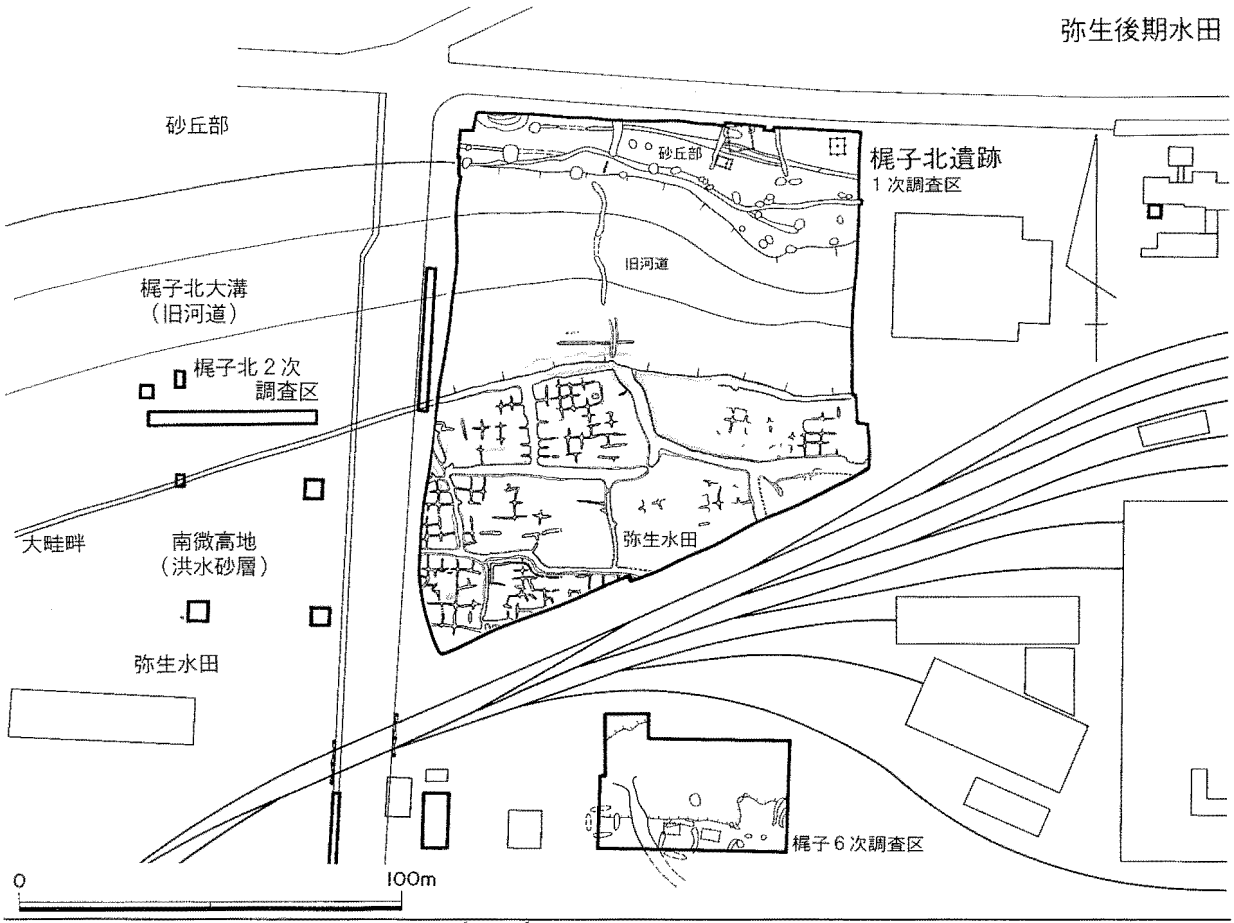
3．弥生時代後期前半の土壙群

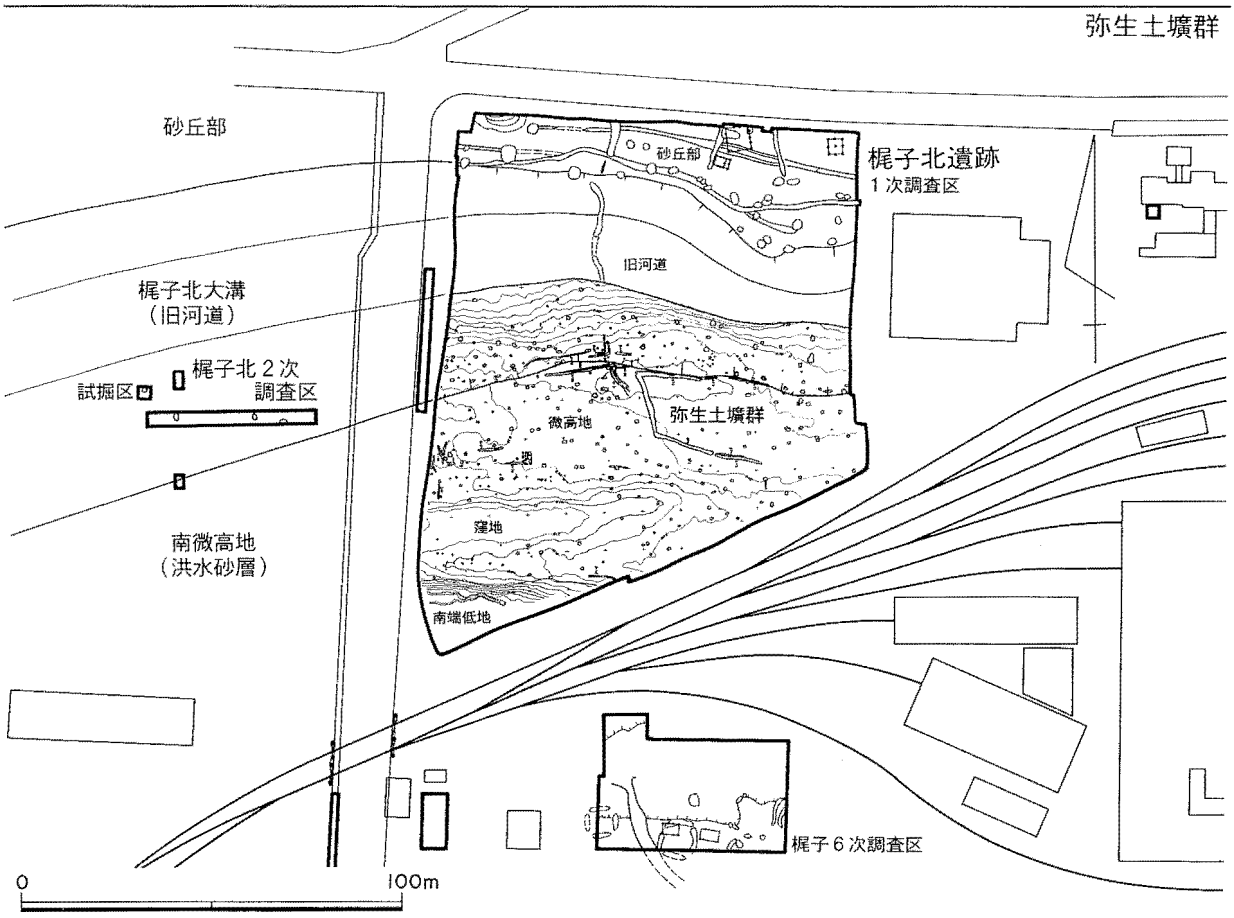
１次調査では水田の下層に，第５図下段に示すごとく，300基以上の土壙群が検出された。これらは遺跡の基盤層をなす洪水砂層（５層）に掘り込まれているが，実際は４層の途中から掘られている。土壙群は今回の本調査区でも３基が，また試掘区でも検出されていることから，その広がりは，東西200m南北90m以上に及んでいたことが明らかとなった。

土壙は灰色粘土と黒色粘土がブロック状に堆積していることから，掘った後，直ちに埋め戻されたものと考えられる。こうした状況から，土壙の性格は墓と推定しているが，人骨や副葬品を出土するなどの確証を得ているわけではない。また年代についても全くと言って良いほど土器を伴っておらず，厳密な年代を確定するまでには至っていない。上層に存在する水田の年代から，土壙の年代を弥生時代後期前半と推定しているに過ぎない。

ところでこのような土壙は，梶子北遺跡から南東に1,300～400m離れた鳥居松遺跡でも発見されている。この遺跡では，梶子北遺跡のようなブロック状の覆土を持つ土壙と，水平（レンズ状）堆積の覆土を持つものの両者が存在した。後者は堆積状況から，掘った後そのまま自然に埋もれたと推定されるもので，これらには土器を伴う。この土壙の年代は，出土土器からほとんどが後期前半であるが，わずかに後半に及ぶものがある。前者の土壙は梶子北遺跡と同様に，遺物を伴っていない。年代は層位から，梶子北遺跡と同じ後期前半と考えられている（浜松市1997）。

ブロック堆積の土壙を墓と考えるのであれば，梶子北遺跡の土壙の被葬者は，南に広がる梶子遺跡





第5図　梶子北遺跡弥生水田(上)，下層土壙群(下)全体図

の居住者となろう。集落の周辺には，方形周溝墓群（現在，当期のそれは確認されていない）とは別に，こうした土壙群だけで構成される墓域が広く存在したのだろうか。

4．梶子北大溝と伊場大溝

１次調査では，調査区の北半に旧河道（梶子北大溝）を検出した。梶子北大溝の幅は東で40m，西で58m，深さは約１m強である。幅が広い割りには，浅い河道である。第１砂丘と洪水砂層との間に形成された河道で，河底の標高から，水は東から西に流れていたと考えられる。

今回，Ｓグリッドの調査において南肩部が検出されたことにより，河幅は西へ行くに従いさらに広がっていたと推定されるに至った。第２図を見てもらうと，梶子北大溝は東からやや南に向きを変えて西へ延び，伊場大溝は北西から南東方向へ延びていることが判る。このことから，両者は現在の日本たばこ産業浜松工場あたりで連なっていた可能性が高い。２つの埋没河道は，梶子北大溝に広沢の谷からの流れを加え，伊場大溝に連なっていたと推定するのが最も自然であろう。梶子北大溝の形成年代は，洪水砂層が流入した後（約4,000年前），カワゴ平火山灰（約2,900年前）が堆積するまでの間である。

梶子北大溝からの出土遺物は，弥生時代中期中葉以降のものが検出されている。目立って多いのは，弥生時代中期中葉～後葉，古墳時代前期，７～10世紀の遺物である。伊場大溝の形成ははっきりしないが，梶子９次調査では，古墳時代前期の古式土師器が河底で検出されている。古い時期の遺構と重なっている可能性もあるが，形成時期は梶子北大溝よりは遅れる。５世紀後半以降は出土遺物も多くなり，明らかに河道として存在していたと見て良い。少なくとも古墳時代中期以降，梶子北大溝は水を伊場大溝へ流していたと思われる。

伊場大溝からは，100枚を越える木簡や多量の墨書土器，また律令祭祀に伴う多くの木製祭祀遺物（人形・馬形・舟形・斎串など）が出土した。これにより，７世紀以降の地方郡衙の実態が明らかになり，全国的に注目される契機となった。梶子北大溝でも，１次調査で「大領」と記された木簡をはじめ，８枚の木簡や絵馬，多くの墨書土器，銅製帯金具など，郡衙の存在を予想させる遺物が多く出土した。実際，梶子北遺跡の南東部では，何度か述べたように年代は９・10世紀とやや降る時期のものであるが，郡庁もしくは館と考えられる建物群が発見された。

伊場大溝は，上流部が梶子北大溝と予想され，下流は現在森田町に所在する九反田遺跡（浜松市1997）まで確認されている。九反田遺跡では伊場大溝の東側傍らに，８世紀前半の瓦葺き礎石建物跡の存在が確認されるなど，伊場・城山遺跡を中心に，古代敷智郡の郡衙関連遺構が，東西南北約１km に及ぶ広い範囲に存在した実態が明らかとなった。

参考文献

(財)浜松市文化協会　1997.3　『梶子北遺跡（遺構編）』
(財)浜松市文化協会　1998.3　『梶子北遺跡（遺物編）』
(財)浜松市文化協会　1997.3　『鳥居松遺跡』
(財)浜松市文化協会　1997.9　『九反田遺跡』

写真図版 1

A. 発掘調査前
（東から）

B. 一次調査面
完掘状態
（東から）

C. 二次調査面
発掘調査中
（西から）

写真図版 2

A. ＳＫ 01
（南から）

B. ＳＫ 02
（東から）

C. ＳＫ 03
（北から）

写真図版 3

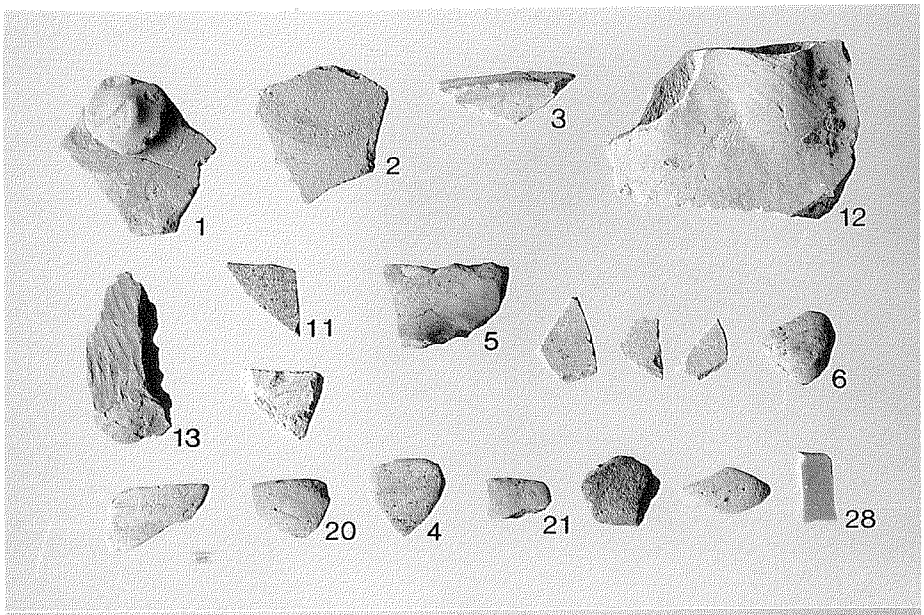
A. 二次調査面
完掘状態
(東から)

B. 実測作業中
(西から)

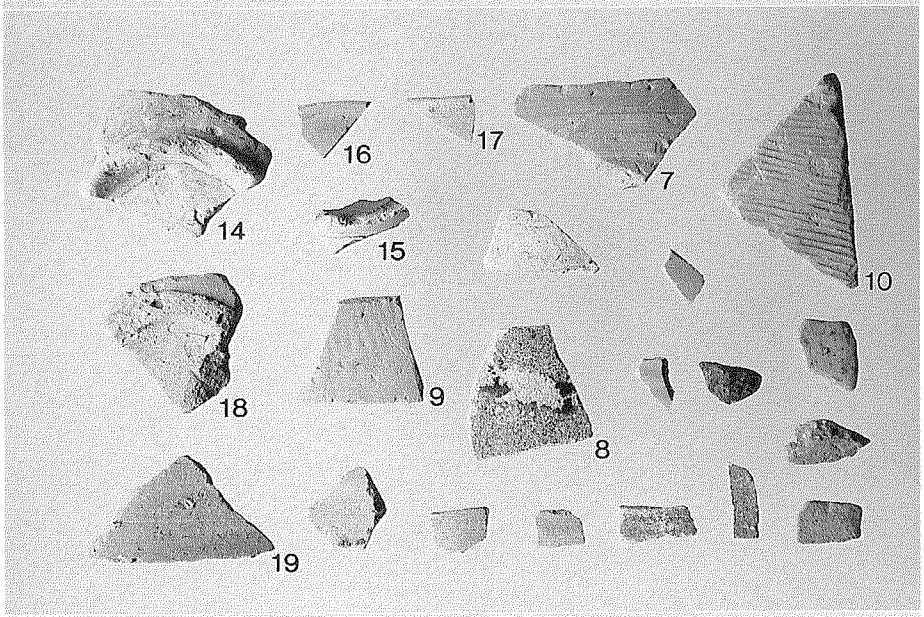
C. 発掘調査
完了状態
(東から)

写真図版 4

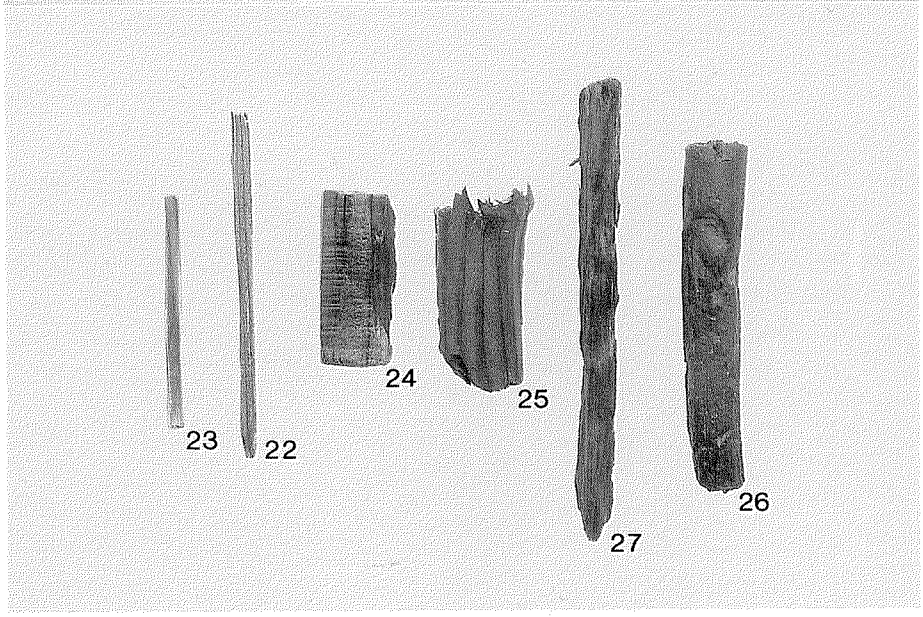
A. 出土土器
（調査区西半）



B. 出土土器
（調査区東半）



C. 出土木製品



報告書抄録

書名（ふりがな）	梶子北遺跡Ⅱ（かじこきたいせき）
副書名	
巻次	
シリーズ名・番号	
編著者名	鈴木敏則
編集機関	浜松市博物館　〒432-8018　浜松市蜆塚４丁目22－１　053(456)2208
発行機関	(財)浜松市文化協会　〒430-0916　浜松市早馬町２－１　053(453)5311
発行年月日	1999年12月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
梶子北遺跡Ⅱ（かじこきたいせき）	静岡県浜松市（しずおかけん はままつし） 西伊場町（にしいばちょう） 2248番地18外	22202	12－27	34度 41分 45秒	137度 42分 37秒	1999年 10月18日 ～ 10月22日 （５日間）	150㎡	宅地建築に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記記事
梶子北遺跡Ⅱ	墓域	弥生時代後期前半	土壙3	なし	広域に土壙群が存在
	水田跡	弥生時代後期～古墳時代前期	水田（大畦畔）		大畦畔は梶子北大溝の南側肩部
	旧河道	奈良～鎌倉時代	（包含層）	須恵器,土師器 灰釉陶器,山茶碗 青磁碗,板材	梶子北大溝

梶子北遺跡Ⅱ

1999年12月10日

編集　浜松市博物館　〒432-8018
　　静岡県浜松市蜆塚４丁目22－1
　　ＴＥＬ 053-456-2208
発行　財団法人　浜松市文化協会
印刷　株式会社　開明堂